

# 地域とつながる開かれた学校の在り方

## — 中学校における地域との関係を深める学習活動を中心に —

学校力開発コース (10220916) 奥 津 秀 昭

生徒が生きる力を身につけていくためには、地域社会との協力や地域社会の教育力を生かして各教科の学習を充実させることが必要である。そのためには、現在の学習活動を見直し、より開かれた学校としていくための地域との連携・協力が必要となる。そこで本研究では、山形県を中心として県内外の小中学校の事例を取り上げながら、地域に開かれた学校としての望ましい学校の在り方について提案する。

[キーワード] 開かれた学校, 中学校, 社会力, 地域社会の協力, 自己確立

### 1 問題の所在と方法

#### (1) 問題の所在及び研究の背景

①学校が閉鎖的になってしまった歴史的根拠  
イギリスにおいて 19 世紀末に義務教育制度として結晶した学校制度は、教える内容・その時間・場所などあらゆる面でサービスの絞り込みがなされている部分に特徴がある。しかも、ここでは、教育内容の徹底した絞り込みを行う中で学校に行けば、読み・書き・計算が身につくという信頼を得ることとなった。明治維新ののち近代化していった日本社会では、伝統的に存在した寺子屋制度ではなく、国家管理の巨大システムである学校というものが教育の中心的な存在となっていった。

日本の教育制度も義務教育制度を取り入れる中で、より徹底した事前制御を行い、学年の所属、担任、学ぶ教室などがあらかじめ決定されるという、生徒統制のテクノロジーを確立していった。このような徹底した事前制御を行っていく上では、閉鎖的にならざるを得ない。つまり、授業の成立に不要だと考えられる人物、ものがすべて排除され、学習活動に無縁な活動が入り込むことも制限されるのである。その結果として、柳(2005)は「12 年間もの長期にわたって自己決定権を喪失した生活がもたらす結果は、いかなることであろうか。」と、危惧している。

#### ②学校が開かれなくてはならない理由

1998 年 9 月の中教審の答申にて、「地域住民への説明することの必要性、信頼に応えるために学校を開かれたものにすべきだ」という報告がなさ

れている。さらに 2003 年 3 月に出された小・中学校設置基準でも、「開かれた学校づくりを行うことと、学校と保護者や地域との連携が不可欠」という内容が示された。2008 年に策定された「教育振興計画」でも、基本的方向として、社会全体で教育の向上に取り組むことが打ち出された。このように相次いで、「学校が開かれるべき」という方向が出された背景として、かつては、無条件で信頼されていた学校がそうではなくなっているという面がある。学校が抱える問題が、多様化・複雑化しているという現状、子どもの学力低下・社会的自立の困難という現状、学校・教員の不祥事の増加や指導力の低下という現状などが信頼されなくなった理由である。①で指摘した閉鎖的になってしまった学校への反省と、学校が抱えている諸問題を解決す方策として、「開かれた学校」というものが要請された。

③子どもの自己確立につながる学びを行うために  
石井(2009)は「現在多種多様な〇〇教育が学校に持ち込まれている。消費者教育、金融教育、食育教育、キャリア教育など。これらの教育は、家庭を中心になされてきたことも多くある。また、親が子供に伝えるべき内容もある。にもかかわらず、学校に投げかけておけば一応責任が果たせるということから、学校がある意味ではよろず承り所となってしまう。」と指摘している。

開かれた学校づくりを進める中で、地域と家庭そして学校の間でもう一度、お互いのなすべき事の確認を行いたい。

さらにその三者が協力する中で、義務教育段階で必要とされる自己の確立につながる、自分の住む地域、自分の家・家族、自分の学校に対するプライドを育てていきたい。そのために、地域や保護者と協力する開かれた学校について研究を進めたいと考えたのである。

## (2) 研究の目的

本研究の目的は、以下の3点について実践検証することである。

- ①現在の学習活動を開かれた学校という視点から再度見つめ直す
- ②地域とつながる学習活動を行う中で、広がりある学び・深まりのある学びについて探る
- ③地域社会の教育力を活用した学びの具体化

## (3) 研究の方法

今年度は、先行実践の調査と教育実習の省察から研究理論につながる視点を検討する。また、地域との積極的な連携を持つことで学びの質を高めている地域・学校の実践について聞き取り調査を行い、開かれた学校の取り組みの実践について学ぶ。これらをもとに、現任校における学習活動の地域との連携・協力について提案する。

来年度は、この提案をもとに現任校で実践を行い成果や課題を洗い出し改善策をまとめて、より効果的な地域との連携・協力について整理する。

## 2 先行実践の検討

### (1) 山形県戸沢村での事例

戸沢村では、「戸沢共育プラン」「学校と地域共同事業」などを柱として、地域社会と学校教育とが深く関わりながら、広がりのある・繋がりのある学びが学校現場で展開されている。

その代表的な取り組みが「通学合宿」である。これは、子どもが合宿して共同生活を送りながら、学校に通うという体験学習である。通学合宿の間子ども達は炊事、買物、掃除を自分たちで計画して行う生活体験や、もらい湯などの地域の大人と関わる経験をする。

また「地域教育カリキュラム」ということで、総合的な学習の時間の単元を「学社融合のカリキュラム」ということで展開していて、地域住民や保護者が参加したダイナミックな活動としてこの取り組みがなされている。

以上の様な活動を通して、児童生徒が広がりのある学びを経験するだけでなく、児童生徒とのか

かわりを通して、地域の方々が、生きがい・やりがいを見出していることが印象的である。

戸沢村で地域の社会力を生かした取り組みが実践されていった背景には、行政を中心にした取り組みがなされていっただけでなく、村民の間にも危機感があつた事が挙げられる。

その危機感とは「異世代間の交流」の重要性である。三世代同居が一般的な戸沢村でも、子育てに対して祖父母世代は関わりたくないという状況があつた。さらには世代間でお互いが「何を考えているかわからない。」という状況も生まれた。この村民の危機意識と行政の取り組みがうまく結びついたことが戸沢村の実践に大きく影響している。

さらに「山形大学エリアキャンパスもがみ」の取り組みの中で多くの大学生が最上地区、とりわけ戸沢村に多く関わり児童生徒を核として、異世代間の交流に大きく寄与した事も重要である。

まとめてみると、戸沢村の実践が一定の成果を納める事が出来たのは、行政・地域・学校・保護者・大学が連携を取りながら実践を積み上げたためであると考えられる。

## (2) 実習での学びより

### ①山形市立S中での実習

～ボランティア活動の推進を通して～

S中では、学校を挙げてボランティア活動に積極的に参加しようとしている。活動としては、校友会（生徒会）が企画するエコキャップ活動、校外地区班会ごとに夏休みを利用して企画する活動、さらに「登録制ボランティア活動」を行っている。この登録制ボランティア活動には、全校生徒の約6割が参加している。活動としては、とっておきの音楽祭の広報活動や支援活動、地区の夏祭りなどの手伝い、仙山交流味祭りの活動支援、駅西浄化隊（学区でもある駅の西側のゴミ拾いや歩道のガムはがし）などがあげられる。この活動を通して、中学生自身は、自分がマンパワーとして活躍できる事を実感するとともに、地域の人たちも「中学生」を見つめ直す事が出来ている。

### ②朝日町立N小学校の実習

～地域の先生と行う総合学習の学びより～

N小学校では、4, 5年生が地域の方の協力を得て総合的な学習の時間に米づくりをおこなっている。今回の実習では、脱穀と一緒に体験した。この学習ではいくつかの発見があつた。

第一点目として、実際の道具を持ってきて、技

術の進歩や米づくりの歴史という学びがなされていたという点である。脱穀作業は、現在コンバインで行われているが、千歯こき→足踏み脱穀機→ハーベスターという流れがある。その一つ一つを子どもたちに体験させ、実感・納得しながらの学びがなされていた。

第二点目として、農業への思いを本音として語り伝えていることである。消費者として生活しては見えてこないことを、生産者の方の語る生の声として聞き、体と心で生きた学びが、なされていると感じた。

### 3 実践と結果

#### (1) 山形市立 S 中での社会科の授業での実践

地域素材を生かした授業づくりということで、「太平洋戦争中の暮らしの聞き取り」を教材とした授業を行った。これまでの授業実践の中でも聞き取りを教材とした授業を行ってきたが、書かせっぱなしで、聞き取りしてくれた生徒たちの十分な評価となっていなかったのではないかと、という反省があった。また、聞き取りできた生徒と聞き取りできなかった生徒との交流が不十分だった事などを今回の自分の課題として捉え実践した。担当したクラスは三クラスでそれぞれにアンケートを集約・分析し授業での発表者も事前に指名し、聞き取った時の様子も織り交ぜ発表するようにした。さらに発表を聞く生徒たちにも間接的にでも聞き取り体験ができるように、プリントの中に発表に関するメモなども取り入れた。以上のような手だてと発表してくれた生徒達の頑張りで、聞き取りできなかった生徒達も「戦争を生き延びた人しか語るこのできない思いを聞く事ができた。」「戦争を体験した人がいなくなる日が必ず来ます。だから私たちは戦争を軽く考えてはいけないし、忘れてはいけない。私たちが語り伝えていかなければ。」という学びができた。

#### (2) 実習や調査研究活動を通じて得た成果

##### ①生徒を通して結びつく学校と地域

S 中では生徒を育てていくための様々な取り組みがなされていた。日々の活動が見える校友会活動を通しての取り組み。個々の生徒の考え方や成長を生かした掲示教育を通じての取り組み。マネジメントを活用した学校経営・学級経営を通じての取り組み。さらに S 中の特色でもある教育相談・特別支援の充実も学校と地域を結び付ける役

割を果たしている。教室復帰プログラム、不応支援授業などの個別のプログラムを充実させている事が、一人一人の育ちにつながっていた。

以上のような取り組みを通じて、地域・保護者から S 中であれば安心して通学させられる、という信頼へ結びついていた。

黒沢 功は「地域の信頼を得るためには、生徒達からの情報発信が欠かせない。そのためには、生徒達と教師の信頼関係が大切である。その信頼を作るのが、日々の授業・日々の活動であり、行事、部活動である。」と指摘していることにつながる。

##### ②地域に開くという事

先行実践で取り上げた N 小学校でも、地域とつながり、地域から協力を得て学習を行ったことで体験を通じ、深まりある、広がりある学びがなされ、一人一人が農業についてそれまでとは違った視点から学ぶことができた。

また、S 中では、ボランティア活動を通して地域に開き、地域と関わる中で生徒たち自身が地域からあてにされる存在になっていることに気づき、年間を通じてボランティア活動に参加するようになった。

千葉県のア小学校では学校を開く中で、人が循環する組織運営がなされている。地縁・血縁とも違う「子縁」という考え方がそこにある。「子どもを介した地域の大人同士をつなぐ考え方」である。さらに PTA 組織を改革し、子どもの卒業とともに学校に関わらなくなる地域の大人たちを「卒業しない大人」として組織し、人材バンクづくりも成功している。

家庭の空洞化・子どもと社会の隔たり・大人の権威の低下などの教育の危機とも言える問題に対して、学校を開く中で歯止めがかけられると考えられる。

### 4 考察

以上を踏まえながら、開かれた学校づくりを推進する上で、大切な事を大江町の実態に合わせ、考察できる点を 5 点述べる。

#### (1)学習活動と地域のつながりについて検証する。

現任校の学習活動を地域素材の活用・地域民の協力・現地での学習・地域から要請などの観点から検証する。さらに検証した内容について教職員間で共有化し、より質の高いものにしていく。

また、地域の資源の洗い出しを行い、学習活動

につながる素材を見つけ出し、教材化を検討する。

## (2) 日々の実践の問い直しをする。

日々の授業、日々の活動でやり取りされる生徒の思いや考えを丁寧に見取る実践を積み重ねる中で、生徒との信頼関係づくりを行う。

さらに、生徒達の考えや成長などを校内に掲示することによって生徒同士の関係も高められるようにする。

## (3) 「生徒の姿」を地域の人達に知ってもらうためにも地域貢献活動を仕組んでいく。

自分の住む地域や自分たちの学校を支えている学区内に目を向け、自分たちで取り組める活動を見つけ出す。現在、校外班会単位で取り組んでいるボランティア作業を「地域のニーズ」を取り入れたものにするところからはじめたい。

## (4) P T A の範囲を超えた「校区コミュニティ」の可能性を考える。

現任校は、一町一校であるため広範囲な学区となっている。そのため、学校から遠い位置にある地域にとって「自分たちの学校」という意識は低くならざるを得ない。しかし、学校を開いていく中で、異世代・異年齢の多くの人たちから関わってもらう中で、「交流が活発なコミュニティづくり」につなげていきたい。

## (5) 保護者、行政、研究機関との連携を仕組んでいく手だてを考える。

戸沢村の実践につながった学校・地域・保護者・大学・行政とのお互いの連携について、大江町で実施可能な部分の検証を行うとともに、今後必要とされる連携のポイントについても整理していく。

## 5 到達点と課題

### (1) これまでの研究で明らかになったこと

地域とつながりを生かし、学校を開いていく中で教育活動を展開することで、児童・生徒は豊かな関わりを経験し、結果として自己存在感を得る事が出来ている。さらに児童・生徒の活動は、地域にとってもプラスの効果をもたらしている。

また、学校が地域・保護者から信頼されるためには、日々の教育活動が重要であり、それは生徒の姿から保護者・地域に伝わっていくものである。学校を開いていくということは、学校・授業について語れる生徒を育てる事につながっている。

従って、毎日の授業・生徒の関わりについて生徒目線の実践がなされているのか、教師間で日々

検証することが重要である。

## (2) 課題

O 中として地域とつながる開かれた学校について本校職員のコンセンサスを得る必要がある。さらに、保護者の意識についても聞き取り調査などを行い、保護者のニーズについてもより詳しく検証する必要がある。

表 1 O 中地域とつながる開かれた学校推進スケジュール (案)

4 月～	本研究概要を本校職員に提示・説明、実践計画策定
5 月～	授業実践を通じた地域とつながる開かれた学校づくりの実施 教育活動と地域とのつながりについて整理する 保護者の意識調査も実施
夏休み	研究概要等について修正加筆
8 月～	振り返りと修正した内容に基づいて実践
12 月～	O 中地域とつながる開かれた学校に向けた実践総括
2 月～	教育実践の成果提示 学校だより、研究だより等で成果を発信

## 注

1) 黒澤 修氏(前金山町教育委員会教育長)に面談して聞き取った。(2010.9.8)

## 引用・参考文献

- 池田 寛：『学校再生の可能性』大阪大学出版会，2001
- 石井昌弘：『丸投げされる学校』育鵬社，pp65，2009
- 梶田叡一・山極 隆：『教育の最新事情』，ミネルヴァ書房，2009
- 門脇厚司：『学校の社会力』朝日新聞社，2002
- 岸 裕司：『学校開放でまち育て』学芸出版会，2008
- 宮川公男・大守 隆：『ソーシャル・キャピタル』，東洋経済新聞社，2004
- 柳 治男：『学級の歴史学』講談社，pp188-189 2005
- 山形大学地域教育文化学部：『平成 19 年度新教育システム開発プログラム』，山形大学地域教育文化学部，2008